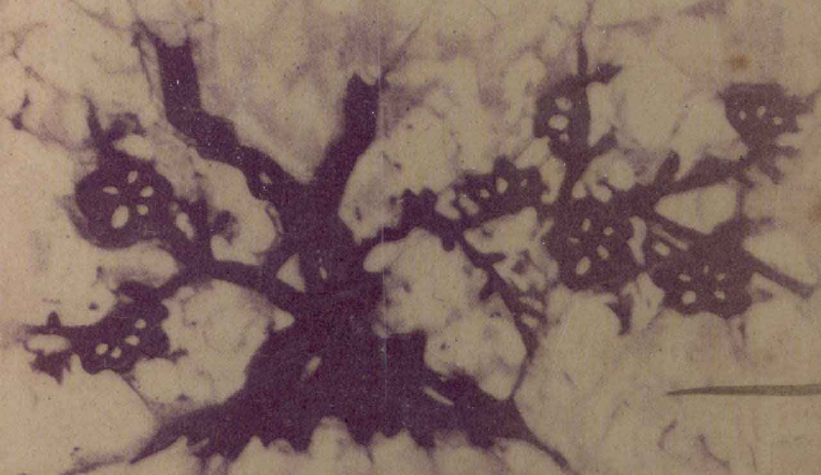


書全典古本日

記日蛉蜻



朝日新聞社編刊
日本古典全書

監修

佐佐木信綱 新村 出 津田 左右吉
辻善之助 藤村 作 和辻哲郎

蜻蛉日記

校註 喜多義勇

記





昭和二十四年七月二十五日印刷・昭和二十四
年七月三十日發行・朝日新聞社編輯・日本古
典全書「蜻蛉日記」・校註者喜多義勇・編集
兼發行者東京都千代田區有樂町二の三朝日新
聞社杉山胤太郎・印刷所東京都港區芝三田豐
岡町八圖書印刷株式會社・發行所東京都千代
田區有樂町二の三朝日新聞社・電話丸の内一
三一番

定價 百七十圓



目次

口 解

繪 原色版一葉

說

.....三

一 時

代

.....三

二 作者とその周圍

.....五

三 兼家とその周圍

.....八

四 日記の事件と人物

.....二

五 書

名

.....一七

六 底本及び諸本

.....一九

七 參考書及び論文

.....三〇

八 現代的意義

.....三三

九 蜻蛉日記年表

.....三六

圖

.....三五

例

.....四〇

目次

本

四

文

次

11

पुं

上

卷

四三

中

卷

九七

下

卷

二六六

蜻蛉日記

喜多義勇



解 說

一 時 代

蜻蛉日記は、藤原兼家の妻となつて道綱を生んだ一女性の書いたものである。兼家は藤原師輔の第三子、延長七年（西暦九二九年）に生まれて、正暦元年（九九〇年）に六十二歳で薨じた。その妻道綱の母は、生年は明らかでないが、歿年は長徳元年（九九五年）と推定されてゐる。そして、この日記は、天暦八年（九五四年）から天延二年（九七四年）までの記録で、それを上中下の三卷にまとめたものである。

さて天暦八年は、古今和歌集撰進の年の延喜五年（九〇五年）から五十年の後にあたる。その半世紀の間に、伊勢物語、土佐日記、大和物語、後撰集などの作品があらはれてゐる。そして古今の年までおよそ半世紀は六歌仙の時代であるとともに、歌合發生の時代であり、また物語の祖、竹取の書かれた時代でもある。さらに遡る一世紀間は、天平勝寶三年（七五一年）の懷風藻にはじまつて、弘仁期を中心とする漢詩文の全盛時代であり、一方に和歌が隱微のうちに大きな變化をとげた時代である。漢詩文の世界は別として、漢字を借りて國文を託した時代は、大體この期間を境として終りを告げた。竹取物語の文體が漢文

直譯的なところを残してゐるために、あるひはその原型は漢文ではなかつたかといはれ、弘仁の日本靈異記や寛平の新撰萬葉集の和歌が、漢字の文學としてほとんどその最後の姿を示してゐるにすぎない。かうして、次第に漢字を使用した時代の記録は過去のものとなつて、わが古典最高の萬葉集さへ、いつ編まれたかわからなくなつてしまつた。ちやうど天曆五年（九五一年）には梨壺の五人によつて萬葉集の讀み方が考へられるやうになつたが、つひに、その正しい讀み方を見出だすことが出来ないまでに時代は變遷してゐる。そして、このやうな變化を導いたのは、全く假名の發明とその使用が時とともに優勢になつた事情によるのであつて、それには當代の女性のなした役割がはなはだ大きい。平安文學とは女流文學ないし女流的文學の別名であつて、いはゆる「たわやめぶり」一色の世界である。物語文學にはそれでもなほ男性の手になつたかと想像されるものもあるが、いはゆる日記文學はすべて女性のものといつてよい。土佐日記はなるほど男性のものであるが、そのはじめには有名な「男もすなる日記といふものを女もして見むとてするなり」といふ斷り書きがあるではないか。

この日記の時代は、天曆から天延にかけての二十年間で、その前半はいはゆる天曆時代で、延喜の時代と並稱される治世であるが、政治的には藤原の專權時代であり、經濟的にはやうやく地方の勢力が強くなりはじめ、地方に對する中央の力は次第に衰へて來た時である。文學的に見ると、古今に續く勅撰集としての後撰集は作られたが、現在見る姿ははなはだ不整備なものであつて、撰者梨壺の五人の歌が一首も入

らなくて、かへつて古今の作者が幅をきかせてゐる。當時最大の文人とされた源順も今から見ればただの才子にすぎないともいへる。そのほか、坂上望城は是則の子、紀時文は貫之の子といふだけであり、清少納言、和泉式部、赤染衛門、紫式部などの天才や、公任、匡衡、明衡などの學者もまだあらはれてゐない。かうして一般にあまり振はない時代であるが、この間に和歌は散文化してその詞書と融合調和し、次第に物語全盛の時代を作つていつた。その先驅となつたのが日記文學、ことに「身の上」の告白を目的とした自傳的なものを内容とする作品である。そして、その先頭にあらはれたのが蜻蛉日記であつた。

二 作者とその周圍

蜻蛉日記の作者は道綱の母と呼ばれてゐる。その實名は知られてゐない。父の藤原倫寧ともやすは、藤原冬嗣の長子長良の曾孫、貞元二年（九七七年）になくなつた。道綱の母の歿年は、小右記の長徳二年五月二日の條に、「新中納言道綱亡母周忌法事」とあるので、その前年の五月になくなつたものと推定するのであるが、その生年はわからない。兼家が二十六歳で彼女を妻としてゐるから、そのとき、彼女がかりに二十歳であつたとすれば、承平五年（九三五年）の生まれとなる。拾遺集以下の勅撰集に三十數首を選ばれ、また當時催された歌合にも參加してをり、藤原範兼（一一〇七年—一一六五年）の撰んだ後六々撰にも加へられてゐる。その家集は、日記の卷末にあるもの、及び同じものが道綱母集と傳大納言殿母上集の二部に

なつて傳はつてゐる。かうして彼女は歌人としてあらはれてゐるが、今日では歌人としてよりも、蜻蛉日記の作者としての方が有名であり、文學的意義から見てもその方が重要である。彼女の生涯は日記の二十一年間を除いてはあまり明らかでない。

父の倫寧は、本朝世紀によると、天慶四年（九四一年）中務少丞であつた。その後右衛門尉、右馬助などに歴任して、天曆八年（九五四年）陸奥守に任ぜられた。かれが地方官になつたのはこれが最初であつて、道綱の母はこの時すでに兼家の妻であるから、彼女は父とともに地方に行つたことはない。倫寧は陸奥守に續いて、河内守、丹波守などを経て伊勢守となり、貞元二年（九七七年）に死んだ。享年は明らかでないが、かりに三十歳の時道綱の母が生まれたとすると、延喜五六年ごろの生まれとなり、歿年は七十歳位となる。文筆の方では、本朝文粹卷六に、源順、藤原爲雅、橘伊輔と連名で一篇がのつてをり、和歌は後拾遺に一首、日記に見える歌がのつてゐる。

彼女の母については、系圖にはなにも記されてゐないが、道綱母集の末には「母刑部大輔認女」とある。ところで彼女の兄弟姉妹のうち、系圖に生母の記してゐるのは、兄理能の母が、「主殿頭奉道女」、弟長能の母が「源認女」とあるだけで、藤原爲雅の妻となつた姉や、菅原孝標の妻となつた妹の母についてはなにも記載もない。日記にあらはれたところでは、兄の理能と姉爲雅の妻が道綱の母と同母らしく、長能は永觀二年、三十六歳（長能集）から逆算して天曆三年（九四九年）の生まれとなり、道綱の母と同母とす

れば、その年齢の差が十數年といふことになつて、あまりに隔たりすぎる。しかも日記では長能とたしかに認められる人物は活躍してゐない。そこで道綱母集の記載にかかはらず、長能と同母とするよりも、むしろ理能と同じ春道の女を母とするのが穩當であらうか。この母は康保元年（九六四年）の初秋になくなつてをり、そのころの記事は日記に詳しい。なほ、彼女には「をば」と呼ばれてゐる人があつた。これは父倫寧の妹かと察せられ、日記に見られるところでは、結婚生活をしてゐるやうではない。また、彼女には系圖以外の弟妹がなほ多數にあつたやうであり、その一兩人については日記によつてうかがふことが出来る。すなはち天祿元年（九七〇年）の暮に、「南面にこのごろ來る人あり」とあり、翌二年（九七二年）二月、「えさらず思ふべき産屋のこともあるを」とあるのが一つ。同じ天祿二年六月、「わがもとのはらから」とあり、これよりさき、安和二年（九六九年）正月、「はらからとおぼしき人まだふしながらものきこゆ」とあるのが一つ。これを一人とするか二人とするか明らかでないが、彼女の「はらから」は相當多かつたやうである。長兄理能は長徳元年八月二十五日に死んだとあるから、あまり年齢の差はなかつたであらう。その妻の一人は清原元輔の女であり、かの清少納言の姉と思はれる人であつた。また姉爲雅の妻は天曆十年（九五六年）四月ごろ夫の邸に移り、康保二年（九六五年）の夏には夫とともに任國に下つてゐる。爲雅は同じく長良の後で、文範の子、元名の孫であるが、その弟の爲信の女は藤原爲時の妻となつて紫式部やその兄惟規を生んだ人である。弟長能は中古歌仙三十六人に加へられ、長能集一卷を残し、勅撰集には

拾遺集以下に五十六首を選ばれてゐる。また菅原孝標の妻となつた妹は、更級日記作者の母である。このやうに近親縁者に多數の文學者をもつてゐて、その作品には直接間接の影響を與へたことが察せられる。

三 兼家とその周圍

道綱の母の生涯を決定し、蜻蛉日記を成立させた人ともいへる藤原兼家は、前記のやうに延長七年（九二九年）に生まれ、正暦元年（九九〇年）に六十二歳で薨じた。その父の師輔は忠平の二男、いはゆる九條殿であるが、天徳四年（九六〇年）正二位右大臣でなくなつた。時に五十三歳であつた。自身は六十歳に滿たないで世を去つたが、長子伊尹は天祿元年（九七〇年）に伯父實賴について攝政となり、二男兼通は天祿三年（九七二年）に兄伊尹の死によつて、かねての目的を達して關白となつた。當時、兼家は兄に越えて正三位大納言で右大將を兼ねてゐたが、まんまと兼通の計略にかかつて、その後寛和二年まで十數年を空しく過ごさなければならなかつた。花山天皇が寛和二年出家讓位を思ひ立たれると、その實現をせきたてて、つひに年來の希望を達し、數年の榮華をむさぼつた。その長子道隆、三男道兼を経て、五男道長は長徳元年（九九五年）内覽の宣旨を受け、兄達の死によつて、つひに自身の全盛を味ひ、三十年に餘る間天下をわがものとしたのであつた。このやうに兼家の一代はまだ十分に天下を獨占するにはいたらなかつたが、それでもなほ目にあまるふるまひが多く、人々の注目をひいたのであつて、かれが道綱の母に求

婚した天曆八年はまだ二十六歳、從五位下右兵衛佐であつたけれども、すでに「柏木の木高きわたり」と書かれ、倫寧がその女の夫として迎へることをひどく光榮がつてゐるのである。一生を國守の地位で終つた人の女として、一代の權勢家を約束された人の愛人となることは誇るべき身の上ではあつたが、他面には權勢に關聯して、數人の女性と愛情の爭奪に苦しまなければならなかつたのも、當時としてはやむをえない事情であつた。兼家の關係した女性には、道綱の母のほか、藤原中正の女、すなはち時姫、「まちの小路の女」、藤原國章の女、すなはち近江、「先帝の御子」、藤原忠韓の女、源兼忠の女などがわかつてゐる。

中正の女、すなはち時姫は兼家の正妻の位置にあり、天曆七年（九五三年）に道隆を生み、應和元年（九六一年）に道兼、康保三年（九六六年）には道長を生んでゐる。また冷泉天皇の女御で三條天皇の母となつた超子は、生まれた時は明らかでないが、道隆とあまり年齢の差がないやうであり、圓融天皇の女御で一條天皇の母となつた詮子、すなはち東三條院は天祿三年（九七二年）の生まれである。このやうに三男二女の母として、時姫の位置は不動であり、兼家の扱ひも格別であつたらうが、道綱の母は天曆九年（九五五年）に一子をあげただけで、次々にあらはれる愛の競争相手には始終なやまされた。さすがに時姫に對しては一步を譲つて妥協的な態度を見せてゐるが、「まちの小路の女」と近江に對しては非常な反感を示してゐる。源平盛衰記卷一に三妻みつめ錐すいといつて皮肉られてゐるのも、あるひは事實だつたかと思はせるほどである。「まちの小路の女」は家系も明らかでなく、ただ日記にかう呼ばれてゐるのであるが、この女と兼

家との關係は道綱の生まれた天曆九年かららしく、やがて天徳元年（九五七年）夏男子を生んだが、そののち一二年でその子も死に、兼家の愛も衰へてしまつた。近江は、日記天祿元年（九七〇年）七月にはじめてあらはれてゐる。この女ははじめ兼家の伯父實頼の愛人であつたが、その死を機として兼家が關係をつけたのである。そして天延二年（九七四年）に子供を生んだ。兼家の子でこの年に生まれたのは、のちに一條天皇の尙侍となつた綏子があり、それは藤原國章の女の所生である。そこで日記の近江は國章の女と判定するのである。なほ、四男治部少輔道義の母は藤原忠朝の女であり、日記の康保元年（九六四年）の記事にそれらしいことが見えるほかにははつきり書かれてゐない。これに對して源兼忠の女については、日記天祿三年（九七二年）二月の條に、この女の生んだ女子がすでに十二三になつてゐて、それを養女にしようといふ話をはじめられ、やがて手もとに引き取つて育てることになつてゐる。兼忠は天徳二年（九五八年）に薨じた人で、その當時、兼家はその女に關係したのである。養女となつた娘はのちに詮子に仕へて「官の宣旨」と呼ばれた。最後に、「先帝の御子」は、日記天祿元年七月の條に、「若しさらすば先帝の御子たちがならむと疑ふ」とあるによるので、村上天皇の第三皇女保子内親王との關係をさすものと思はれる。兼家は天元三年（九八〇年）時姫が死んでからは、大輔といふ女を愛して、この女三の宮には疎くなつた。かうして、兼家の妻妾關係はその晩年に及んでいよいよ亂脈になつたが、道綱の母は天延元年（九七三年）の八月末から廣幡中川のほとりに移り住んで、兼家との交渉を斷つてしまつたので、そののちの心境はあ

る程度平穩であつて、晩年二十年ほどは比較的靜かな生活を營むことが出來たものと想像される。

四 日記の事件と人物

蜻蛉日記の作者は生涯宮仕への經驗をもたない一家庭婦人であつた。したがつて、その生活記録はなんら社會的な關係をもたない「身の上をのみする日記」であつた。夫兼家が同族肉親間の暗闘に心をくだき、官職の昇進と權勢の擴張に努力してゐる間、彼女の求めたものは専ら夫の愛情であり、「三十日三十夜は我がもとに」といふのがその理想であつた。そして一子道綱が次第に成長して來ると、その立身をねがひ、將來への期待をかける心で一杯になる。このやうな狭い視野のうちにも、まれには社會的事件が入つて來て、日記の記事に多少の變化を與へる。天曆時代は藤原氏專權の成つたときである。皇后安子は師輔の女で、「みかどもこの女御殿にはいみじくおぢ申させたまふ」(大鏡)といふ有様であつた。その所生、冷泉天皇(憲平親王)は生後間もなく皇太子に立たれたが、御病弱であつたため、同じ安子所生の四の宮爲平親王をその後繼ぎにしようと考えられてゐた。爲平親王の妃は醍醐天皇の皇子左大臣源高明の女であり、高明の夫人は安子の妹であつた。もし爲平親王が冷泉天皇のあとに即位されるやうなことになる、藤原氏は外戚としての勢力を奪はれることになつて、將來のために大きな不安となる。天徳四年(九六〇年)に師輔が薨じ、ついで安子が康保元年(九六四年)に崩じて、時勢はむしろ高明に有利なやうであつたが、康保

四年（九六七年）に村上天皇が崩ぜられると、藤原氏は同じ安子の所生である五の宮の守平親王を皇太弟に立ててしまった。高明の失望は非常なものであつたが、事件はそれだけに終らないで、師輔の弟師尹は當時右大臣で、高明の下にあることを喜ばず、源滿仲を使つて、橘繁延、藤原千晴らが爲平親王を奉じて亂を企ててゐるよしを密告させ、高明も姻戚の關係からこの事件に加つてゐるものとして、つひに高明を太宰府に追ひやつた。菅原道眞の事件と全く同じやり口であるが、このたびは一段と廣範圍に及んで「禁中の騒動、天慶の大亂の如し」（日本紀略）とさへ書かれてゐる。日記安和二年（九六九年）三月の條には、この事件がくはしく記され、「身の上をのみする日記には入るまじきことなれど、かなしと思ひ入りしも誰れならねば記しおくなり」といつてゐるのは、作者の日記に對する定義があらはれてゐて注意しなければならぬ文句である。

さて、村上天皇の崩御については、康保四年（九六七年）五月の條に、「十餘日にうちの御藥のことありてのしる。ほどもなくて、廿餘日のほどにかくれさせたまひぬ」と書いてゐるが、續いて冷泉天皇の御踐祚となり、春宮亮であつた兼家は藏人頭に轉じた。「悲しびはおほかたのことにて御喜びといふことのみ聞ゆ」と書いてゐるやうに、作者は兼家の昇進を祝ふ方が大切であつた。ところが、このとき突然右兵衛佐藤原佐理とその妻が出家遁世するといふ事件が起つた。「上にさぶらひし兵衛佐、まだ年も若くて思ふとありげもなきに、親をも妻をもうち捨てて山にはひ登りて法師になりけり。あないみじとののしり、